

小学校の交流及び共同学習場面における配慮・工夫と教職員の意識について

山端 沙希

I 問題と目的

交流教育によって、障害のある子どもは学習の内容や学習の場を広げ、より一層社会性を養い、望ましい人間関係を身につけることが期待でき、また、障害のない子どもは、障害のある子どもに対する正しい理解や適切な対応を学習する機会となる。これは、障害者基本法の一部改正により、「交流教育」から「交流及び共同学習」へと名称を変えても変わらない理念である。

久保山（2007）は、小・中学校での特別支援学級と交流学級における交流及び共同学習の課題の一つとして「交流先の学級の担任や児童生徒の意識や理解について」を指摘している。交流及び共同学習が成功するかどうかは通常の学級の担任による意識の影響が大きく（村田，2004）、教師同士の連携や通常の学級担任の特別支援学級児童への意識が大切である（浪岡・三浦，2007）という指摘がある。

そこで本研究では、交流及び共同学習場面において、どのような実践が展開され、意義達成のために具体的にどのような配慮・工夫がなされているのか、その実践の背景となっている教職員の意識も併せて明らかにし、特別支援学級と交流学級双方の子どもたちの教育的ニーズに対応した交流及び共同学習のあり方を検討することを目的とした。

II 方法

1 対象校

全校児童数 500 人程度の中規模の Z 小学校。特別支援学級は 3 学級あり、16 名の児童が在籍している。なお、Z 小学校では、特別支援学級を特別支援学級に在籍する児童だけではなく、必要に応じて誰もが利用できるように特別支援教室として弾力的に運用している。本研究では、Z 小学校の取り組みに準じて、特別支援学級で

はなく、「特別支援教室」と記すものとする。

2 対象者

小学 1 年生の特別支援教室在籍児 3 名が交流及び共同学習を行っている学級の担任（A 先生）特別支援教室担任（B 先生）及び、介護員。

特別支援教室在籍児 3 名の実態を以下に示す。

1) C 児

自閉症。物の名前を言うことができるが、発音は不明瞭。こだわりが強く、知覚過敏がある。

2) D 児

知的発達遅れがある。特に、書字や計算に困難が見られる。会話でのやりとりが可能で、通常の学級の友だちとよく遊ぶ。

3) E 児

自閉症。ADHD。知的に遅れはない。周りの子どもに合わせて行動することが苦手。2 学期からは、算数も通常の学級で学習している。

3 対象場面

生活科、学級活動、6 年生との交流の場面。

4 データ収集方法

交流及び共同学習の場面を参与観察し、観察記録やビデオ記録から教師の配慮・工夫を抽出する。また、教職員へのインタビューや授業後の振り返りシートの記述から交流及び共同学習に対する教職員の意識や実践の背景を明らかにする。参与観察は 2008 年 5 月下旬から 11 月中旬まで行った。

III 結果と考察

1 交流及び共同学習場面における配慮・工夫

抽出された配慮・工夫の一覧を表 1 に示す。

1) 児童が学習に参加するための配慮・工夫

一学期後半・二学期の座席配置図を図 1、図 2 に示す。

一学期の前半は名簿順で、特別支援教室在籍の C 児・D 児・E 児はやや離れて配置されていた。そのため、介護員は、C 児のそばにいても、

表1 配慮・工夫の抽出項目一覧

児童が学習に参加するための配慮・工夫

- 教室内の座席の意図的な配慮
- 題材の設定における配慮
- 日常生活を通常の学級で過ごす
- 全介示場面における個への確認
- 特別支援教室での取り出し学習

児童間の関係を深めるための配慮・工夫

- 学習グループ編成
- 児童間の関係を促す言葉かけ
- 交流学級児童への障害理解
- 差別や偏見への指導
- 学習成果の共有
- 特別支援教室主体の取り組み
- 特別支援教室への移動時の言葉かけ

配慮・工夫を行うための関係者との連携

- 教職員全体への理解啓発
- 担任同士の連携
- 保護者への理解推進
- 介護員との連携と介護員の役割

図2 二学期の座席配置図

他の二人の確認や通常の学級の児童らへの対応に迫られ、C児が教室内を歩き回る様子が見られた。そこで、図2のように一学期後半では、C児・D児・E児を固めることによって、3名の学習の様子を把握しやすくなった。また、二学期からは、算数も交流学級で学習するE児は、独立させ、A先生がE児の様子を把握しやすいようにした。このように、A先生は介護員が動きやすいことや、周囲にC児らと関わることで人間関係を学んでほしい児童らを配置するなど配慮していることが明らかになった。

授業中においては、A先生は全体への指示場面で、全体へ確認した後にC児・D児・E児それぞれに対して再度内容を確認していた。このことから、A先生は3名の様子も確認しながら授業を進行していることがうかがえた。

また、Z小学校では、特別支援教室在籍児童でも朝の会や給食、清掃など日常生活は通常の学級の中で過ごしており、可能な限り、学校生活を通常の学級で過ごしている。そうすることによって、「お客さん扱い」ではなく、特別支援教室在籍の児童らも通常の学級での存在感を失わずにすみ、かつ、通常の学級の児童らにとっても受け入れやすい環境をつくることができると言える。また、交流を行っている教科についても、児童の様子を見ながら、個別に対応し、少しでも通常の学級に入ったときに学習がスムーズになるように特別支援教室での取り出し学習を行い、支援していることが明らかになった。

2) 児童間の関係を深めるための配慮・工夫

初めは、通常の学級の中にC児の独特な言動に対して差別的な見方をしている児童も中にはいた。



図1 一学期後半の座席配置図
(担任は担, 介護員は介と記す。以下同様)



しかし、差別的な言動に対しては厳しく指導するという共通認識の下で日々の交流を重ねる中で、また、通常の学級の児童らが、C児らの頑張りを実感するなかで、児童間の関係が変化してきたとA先生は振り返っている。具体的には、「Cさんはことばの学習を頑張っているんだよ」とか、D児についても、「字書けるようになったね。頑張ってるね」というように評価し、言葉かけをしている。

差別的な言動に対しては信頼関係の中で厳しく対応し、場合によっては、個人間だけの問題ではなく全体の課題として全児童に取り上げている様子も見られた。これは、島倉（2007）の教職員一人ひとりが人権感覚を磨き、人権教育を強化する必要がある、より良い態度の形成を目指すことが大切という指摘のように、その一つの方法といえる。

また、特別支援教室が主体となり、畑で採れた野菜を使用したレストランを実施して保護者や教員、通常の学級の児童らを招いたり、音楽発表会で音楽劇を発表したりしている。音楽劇では、通常の学級からも共演者の有志を募り、100名近くの児童が集まった。B先生は、こうした取り組みを行うことで、少しずつ差別や偏見が取り除かれていっていると語った。また、音楽発表会後の児童の作文シートを読むと、直接C児の名前を挙げ、「Cさんも、大きな声ではっきりと言えてすごかったです」などと感想を挙げている児童も数人いた。このことから、学習成果を発揮できる場や、成果を共有する機会は大切であることがうかがえる。

3) 配慮・工夫を行うための関係者との連携

教職員全体への特別支援教育や発達障害に関する理解啓発は、校内での研修を通して進められている。また、特別支援教室担任B先生は、A先生や介護員がC児らへの対応で迷いがある時に、助言をして共通認識を図っていることが明らかになった。

A先生は、通常の学級、特別支援教室双方の様子を実際に知る介護員が情報の整理・発信・

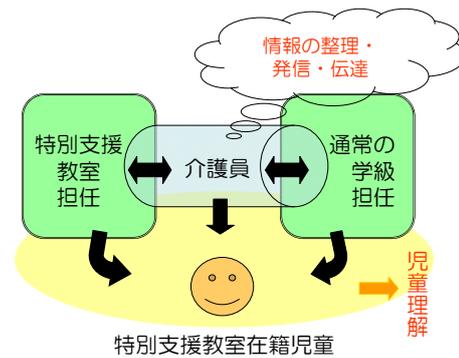


図3 介護員の役割

伝達というパイプ役として役割を果たしていることを語った。A先生へのインタビューをもとにした介護員の役割を図3に示す。このように、お互いの情報を共有することによって、さらに児童理解を深め、児童の実態に即した支援を行うことができる。

2 教職員の交流及び共同学習に対する意識

A先生、B先生ともに、交流及び共同学習のねらいとして、将来、特別支援教室在籍児童が地域や社会に出たときに、知っている仲間を少しでも増やすことに意義があると考えていることが明らかになった。また、通常の学級の児童とのトラブルもあるが、それを避けて考えるのではなく、むしろトラブルがあったときこそ大事な指導の場面であると捉えていることがうかがえた。

また、通常の学級の担任も特別支援教室児童を自分の学級の一員だと捉え、他児と同じように接している。逆に、特別支援教室担任も、在籍児童だけでなく、通常の学級の児童も視野に入れながら幅広く支援を行っている。A先生は、自分の学級だけでなく、学校全体で子どもを見ている、とA小学校全体の雰囲気について語っている。

表1に示すように様々な配慮・工夫が抽出されたが、一方で、A先生は、特別支援教室の児童だからって特別扱いはしない、と語った。他の児童と同じように扱うことで、双方の学級の児童にとっても「みんないっしょ」という意識を生み出すのではないだろうか。これも配慮・工夫の一つと言える。

文献

久保山茂樹（2007）交流及び共同学習の現状と課題：平成17年

度交流及び共同学習に関する調査研究の結果から. 特別支援教育, 25, 10~15

村田隆則 (2004) 教員と児童の交流教育に対する意識についての研究: 小学校教員と児童に対するアンケート調査を通して. 教育学研究, 4, 13-22.

浪岡綾・三浦哲 (2007) 通常学級児童と特殊学級児童の交流を促す一実践について. 情緒障害教育研究紀要, 26, 93-100.

島倉昭宏 (2007) 交流及び共同学習の必要性. 大南英明 (編著), 交流及び共同学習への取り組み. 明治図書, 119-129.